

# 1980年代以降のアジアにおける女性キリスト者の思想形成

## —タイ北部を事例として—

藤原 佐和子

### 要約

本研究は、1970年代末期に萌芽し、1980年代以降に本格的に展開されている「アジアの女性たちの神学」(Asian women's theologies)と呼ばれる神学運動において例外的に学問的蓄積が少ないことが指摘されるタイと日本に注目し、現代のタイにおけるプロテスタント最大合同教派であるタイ・キリスト教団 (Church of Christ in Thailand) の神学教育を担うタイ神学校 (Thailand Theological Seminary)、現在のパヤップ大学マクギルバリー神学校 (McGilvary College of Divinity, Payap University) にて神学教育に従事した4名の女性神学者の思想形成を事例とする組織神学的、キリスト教思想史的研究である。

本研究の目的は、彼女たちの信仰による歩みと働きを掘り起こすことによって神学思想の形成プロセスを検討し、キリスト者が宗教文化的な少数者に留まっている社会における「神学的訓練を受けている女性」(theologically trained women) がキリスト教共同体の内外に対して持つ貢献可能性についての一つの立脚点を示すことにある。本研究は「アジアの女性たちの神学」で提唱されている学際的・循環的・文脈的な方法論を基礎としながらも、これまでのアジアの女性神学者たちによる神学の分かち合いの限界を押し進めるために、文献研究とフィールドワーク、この神学運動の共通語である英語と、現地語であるタイ語の双方を用いる。欧米神学の枠組みを経由せず、アジアの異なる文脈を生きる女性キリスト者から学ぶという着想には、近年、アメリカ在住のアジア系 (Asian) の女性神学者たちの学問的影響力が圧倒的に優勢となっている現状に抵抗し、この神学運動の出発点であるアジア在住のアジア人 (Asian) の女性キリスト者に対する視点を回復させようとする意図がある。

序章では、欧米の女性キリスト者による思想形成から「アジアの女性たちの神学」の萌芽までの流れや、ジェンダー／セクシュアリティ研究、人類学、女性学などの近接領域の研究史とその課題を示した。また、この神学運動における「神学する」(theologizing) ということが、神や人間の問題について語る (God-talk) ことよりも、個人の信仰に照らして神と共に働く (God-walk) という具体的・能動的参与に主眼を置くものとして理解されていることについて取り上げた。

### 第1章 「アジアの女性たちの神学」の諸相

第1章では、この神学運動の制度的基盤であるアジア・キリスト教協議会 (Christian Conference of Asia) の女性担当部、第三世界神学者エキュメニカル協会 (Ecumenical Association of the Third World Theologians) の女性委員会、専門誌 *In God's Image* を発行するアジ

ア女性資料センター (Asian Women's Resource Centre for Culture and Theology) の成立経緯を辿るとともに、1980年代以降に現れている新しい神学理解、方法論に言及し、「神学的訓練を受けている女性」が直面している現在の課題について考察した。

## 第2章 タイのプロテスタント神学の諸相

タイ・キリスト教団は、1867年にアメリカ長老派教会の宣教師ダニエル・マクギルバリー (Daniel McGilvary) とソフィア・マクギルバリー (Sophia McGilvary) によってチェンマイを拠点に設立されたラオス・ミッションを基礎としている。1934年のシャム教会 (Church in Siam) 設立によって教会は宣教師からの一応の独立を得るが、宣教師たちによる影響力は1970年代末期に至るまで強固に維持されてきたと見るのが通説となっている。

第2章では、タイの女性神学者の神学思想を検討するための備えとして、宣教の時代から1970年代にかけてのタイ北部のプロテスタント神学の諸相を概観し、戦後の教会復興の時代に遺された課題に対してどのような教会史的、神学的考察がなされたのか、仏教徒の宗教感情から見るプロテスタンティズムはどのようなものであるか、宣教戦略の一つとしての女子教育がタイ北部の女性キリスト者に与えた影響とは何かについて考察した。

とりわけ、初期の宣教師がプロテスタンティズムを唯一絶対の真なる宗教とする信念のもと、絶対的主義的な教義を吹き込みを行ったこと、それによって、土着文化、宗教性、語彙、概念は宣教師たちによって頑に拒否され、タイ北部の改宗者たちは地域社会から孤立するようになったことは、1980年代以降の女性神学者たちと社会との関わり合いにおいて乗り越えられるべき課題の一つとなっている。

## 第3章 ガモン・アラヤプラティープ

聖書学者として知られるガモン・アラヤプラティープ (Kamol Arayaprathep) の思想形成に注目し、「真なる人間」をめぐる問いがキリスト教の諸教派の一致を目指すエキュメニズムへの確信に結びついていること、それが女性キリスト者の連帯に対する関心にもつながっていることを明らかにした。英語論攷から読み取ることのできる、威厳をもって力強く語る聖書学者というイメージとは対照的に、彼女が神学教育に従事したマクギルバリー神学校やバンコク神学校での聞き取りを通して知ることのできた彼女の姿は、思いやりに溢れた気遣いの人であった。また、イエス・キリストの他に救いに至る道はないと断言していることから明らかに保守的と思われた彼女の神学思想に至っても、聞き取りでは「しばしばリベラルであると批判された」という異なる証言を得ることができた。

そして、彼女が「真なる人間」となることを生涯を通して希求するべきものであると考えていたことは自明なものとして理解できたが、彼女が晩年においてもこのような思いを抱き続け、実際に、定年退職を目の前にした会衆に対して尊厳ある高齢者のあり方を説いていたことはタイ語論攷によらずして窺い知ることのできなかつた側面である。また、神、キリストに対するアラヤプラティープの絶対的な信頼が、幼くして天涯孤独の身となり、人々に忌避される病に苦しんだ彼女が「祈りと信仰によって癒された」という直接的な回心体験に由来するものであ

ることや、神の栄光と祝福が彼女の豊かな宗教的感受性によって日常のただ中において捉えられていたことを明らかにすることができた。

#### 第4章 プラカイ・ノントワシー

タイの神学教育を牽引し、国際的にも知られるプラカイ・ノントワシー (Prakai Nontawasee) に注目した。タイにおける神学教育と国際的なエキュメニカル運動の両方に参与したという点ではアラヤプラティープと類似しているが、ノントワシーにおいてはその関心が国内外のキリスト教共同体だけでなく、力ない人々の不利益を顧みない実利志向の経済開発や消費文化の台頭によって急速に変化していくタイ社会とそれに関係する諸問題や、タイ北部という文脈そのものにまで開かれていることが分かった。

また、その思想形成は「物語を聞き取ること」「社会的分析」「神学的考察」という学際的プロセスを早くも実践したものであり、ノントワシーという女性神学者においても信仰による「語り」と「働き」が決して分かたつことのできない密接なものであること、更には、その「働き」が男性キリスト者との共同によって行われるべきであると考えられていたことが明らかになった。

#### 第5章 ナンタワン・ブーンプラサート-ルイス

タイの女性神学者として最も広く認知されているナンタワン・ブーンプラサート-ルイス (Nantawan Boonprasat-Lewis) に注目し、彼女の思想がノントワシーと同様にタイの経済的復興が「女性の背中」の上に達成されたものであることに対する批判の眼差しを持つものであることを明らかにした。アジアからアメリカへの越境の経験によってその研究視点をアジアと「アメリカの中のアジア」という二方向に分岐させたルイスが精力的に論攷を発表した1990年代は、アメリカにおいて「アジア系」の神学が興隆し、タイにおいてHIVエイズの蔓延が深刻化した時代と符号している。その意味では、タイの文化的、宗教的信条がいかに女性たちに対する不正義の源泉となっているかという問題をアメリカにおいて語るということは、「アジア系」の中でも層の薄いタイ系のフェミニストとしての彼女の責任感によるものであった。

「神学的訓練を受けている女性」としてルイスが懸念していたのは、教えること、書くこと、語ることに付随する権力性の問題である。社会正義 (social justice) への強い志向を持つ彼女にとって「神学する」ということは、女性キリスト者としての神学的考察とフェミニストとしての政治的応答という二つの方法を取るものであり、その性格は命を与えるもの (life-giving)、肯定するもの (life-affirming) であるべきであると考えられた。

#### 第6章 チュリーパン・スィーソントーン

タイ北部の女性キリスト者の現在における代表的存在と言えるチュリーパン・スィーソントーン (Chuleepran Srisoontorn) が、タイ北部の文化と宗教性を否定することによってキリスト者を地域共同体から引き離れた宣教師のエヴァンジェリズムに対する痛烈な批判を出発点として、文脈化された牧会と牧会者のあり方についての新しい理解を示していることについて考察した

彼女は、神学校の教員として実践神学科目を教えるとともに、小さい教会、貧しい教会、街から遠く離れた農村の教会を積極的に訪ねて地元の人々に溶け込むという行動的な牧会を実践している。その働きは、「人々と苦楽をともにする」牧会者のモデルを提唱するだけでなく、「牧師と同じように神に仕える者（ผู้รับใช้พระเจ้าเช่นเดียวกับศิษยาภิบาล）」であるという信徒のモデルをも推奨するものである。按手を受けた牧師と信徒がともに牧会を担うことによる仕える共同体の形成を目指す彼女の神学思想は、その実践と疑いなく接合されている。

## 終章

本研究は、「アジアの女性たちの神学」の持つ方法論的限界を乗り越えようとするアプローチによって以上のような成果を上げることができたが、一方では、キリスト教用語などの独特な表現をはじめとして、アジアの女性キリスト者が母語ではない現地語を媒介として読む、聴くというインプットの難しさや、また、研究対象への効果的な接近に役立ったフィールドワークを通して観察することのできた実践的側面をどのように神学論文に取り入れていくかという点においては未だ課題のあることが分かった。

しかし、正にそれゆえに、アジアの異なる文脈を生きる女性キリスト者に学び、そこで得られた洞察をキリスト教共同体の内外へと還元していくことは、「神学的訓練を受けている女性」の引き受けるべき仕事の一つであると考えられる。その意味では、「アジアの女性たちの神学」において無前提に肯定されてきた「英語で書く」ということの万能性を疑い、タイ語や日本語といった「母語で書く」ということの意義を再評価することは、「神学する」ということを牧師や知識人の専有物としないことを目指す「神学の民主化」の理念にも適うものと言えるだろう。

本研究で取り上げたタイの代表的な女性神学者には、キリスト教共同体の有力者の娘であった者、幼い頃に家族や親戚を失った者、一般的な仏教徒の家庭に育ちながら家族との絶縁をいとわずキリスト教に改宗した者もあった。このように、彼女たちの生きる時代、境遇、信仰のあり方はさまざまであるが、その働きには、キリスト者が宗教文化的な少数者に留まっている社会においても「タイ人であること」「女性であること」「キリスト者であること」という現実をどれ一つとして損なうことなく行きて働くことへの希望が込められている。

また、その神学思想には、①一般の信徒も、牧師と同じように「神に仕える者」であるということ、②それぞれの信仰と賜物に基づき、多様な場所で働き続けるべきであるということ、③社会における宗教文化的な少数者であることを理由にキリスト教共同体に留まって内向化するのではなく、神学思想の射程を「社会正義」にまで展開させていくことによって、実社会への貢献可能性を探るべきであることなど、互いに相通ずる理念、主張を受け取ることができる。彼女たち自身の働きによって説得性を増し加えられているこのような理念、主張には、「神学とは何か」「神学者とは誰か」に対する偏狭な思い込みや既成概念を突破しようとするエネルギーが潜在していると見ることができる。